二十四話　末娘とへび

むかし、娘三人もったえでとあったとしえ。
五月もきて、田、植えだどこで、えっちえっても、田さ、水、いっぺ、入ってえねえかったど。
父、田の畔さえでひとりごと言ったど。
「田さ、だえが、水いっぺいれてければっおりゃザ三人、娘もっていたたえに、どれでも、一人けるどもな」
次の日、田さ、えってみたば、どの田にもちょうどえぐく、水、入っていたけど、そこさ
「それ、おりゃ、入れだおだ」
と背の大きい、色の白い男きたけど。そりゃ白い大きい蛇であったど。してその男
「娘、けるとへらえだどこで、水　入れたおだ」
としえったど。父、だえだって、蛇さ、嫁にという奴えねえど思って、寝て起きねど。
なんぼ、ままけえといってもはておきねえど。
さきに姉娘、いったどこで、
「おれの言うことききてければ、おれ　起きるし、へでねば起きねえ」
としえったど。
「なにしたてや」
と姉娘、しゃべったば、
「おりゃな、こうして、田さ、水、入れてければ、おれの娘、けるとへったどこで、蛇、へでけだ。うが、蛇さ、嫁にいってければ、おれ、起きる」
としえったど。
「だめりゃ、おれ、いぐざ」
としえって、枕、ぼっぷりふんで、姉娘、えったど。
二番目の娘さも言ったら
「だめりゃ。蛇さいぐざ」
としえってえったど。
三番目の娘、あれが一人だ、あれだってなんだえ、えってけるだかと　苦して、なもかも心配してえだけど。
三番目の娘、きたけど。
「父、起きでままけえ」
「おれの言うごと聞いてければ　まま、食し。へでねえば、おれ、ままもなも食わえねで死なねばなんねえ」
「おれ、こうして田さ、水、へねえたえに、田さ、水、へでければ、おれ、娘、けるってへったどこで、水、入れてけえだど。そりゃ蛇だどや」
「ええ、おれ、えぐ」
と、娘、しえったどこで、したどこで、父、ゆっくりして起きで、まま食ってえだど。
日にちもたって、娘、嫁っこにいぐことになったど。したば娘が、
「おれさば、なんにもいらなえがら、糖、入れた俵、千俵、支度してけろ。あとなんにもいらねえたえに」
としえったど。父、糖、入れた俵、千俵支度したど。したどこでその日、家さ、とまってえたば、蛇、迎えにきたけど。俵を蛇さ運らせだど。千俵なし、くばらせだど。

蛇、えるどこ、沼だど。その沼さ、その糖俵、入れねえばならねえどし、鳥にかぐねばならねえたえに、糖俵を沈めるど思って、尾っぱもっておっつけ。頭けもっておっつけしたども、糖俵、なかなか、沈まねえけど。そのうち、蛇、おったってしまって、死んだものみでえに　なったけど。して、その娘、もどってきたけど。どっとはらえ。